

# 古今集における年代区分の再考（一）

## ——従来説の検討——

小橋 龍人

はじめに

本論は『古今和歌集』（以下〈古今集〉とする）の研究における年代区分の再考を目的とする。

古今集には詠作時期の異なる歌が収載されており、その年代の区分として三期を設けることが半ば通説となっている。いわゆる第一期「読人知らず」、第二期「六歌仙」、第三期「撰者」時代の三期である。しかし、それぞれの時期が指す年代の幅については、諸研究で相違がみられる。そして、二〇〇〇年代前後の研究では第二期の開始時期の違いについて取り上げられることが多く、開始を文徳朝から（嘉祥三年〔八五〇〕）とする小沢正夫<sup>①</sup>と、仁明朝から（天長一〇年〔八三三〕）とする島田良二<sup>②</sup>の説が相容れないものとみられている。

ただ、小沢、島田の両説はそれ以前の研究を受けて成立しているものである。当然、年代区分の検討においては、この両説以外にも多くの論があることを考慮しなければならない。例えば、従来の年代区分論を調査すると、年代

観や時期の幅の相違は第二期に関する部分だけにとどまらない。さらには一期の年代区分に関連し「読人知らず」の捉え方についても見解の相違がみられる。

そのため、本稿では、明治時代以降の主要な年代区分論における年代区分の捉え方、立場、視点を整理した上で、古今集歌の年代区分を行うためには、詠者注記等によって示される詠者による年代（Ⅱ詠者の年代）、和歌集の詞書や古記録及びその他の資料等によって示すことができる詠作の時期（Ⅱ詠作の年代）、歌の表現の時期的変化等に基づく年代（Ⅱ表現の年代）の三要素を分けて考えるべきであることを論じ、従来の年代区分論が往々にして、この三要素を不用意に並立させていることによって混乱が生じ、その結果、諸説の食い違いが発生したことを明らかにする。

なお、本稿において筆者が用いた古今集の本文は貞応二年本を底本とする岩波古典文学大系本（注（二三五））の校訂本文により、適宜、西下経一・滝沢貞夫編『古今集校本』（笠間書院一九七七年）を参照した。他の歌は『万葉集』のみ国歌大観番号を付したが新編国歌大観によった。引用中の○内の注記、傍線等は断わりのない限り筆者によるものである。

### 一、明治から戦前の研究

#### 金子元臣『古今和歌集評釈』<sup>四</sup>

三期区分の見方<sup>五</sup>は、この時期における代表的な古今集の注釈である金子の著書から既にみられる。同書冒頭に置かれた「古今和歌集概説」は次の一文から始まっている。

奈良朝のはじめに、人麻呂、赤人の両歌聖が逝かれてから、記紀の余響を鼓吹する者がなくなり、平安朝のはじめに、大伴家持が薨じてから、万葉集の福音を伝道する者がなくなつてしまつた。

記紀（『古事記』、『日本書紀』）や『万葉集』の書名が提示されるなどの文学史的な記述から始まることは注目すべきで、これが全体の骨格となつてゐる。そして、三期区分に関しては、同書概説の「各巻概観」（四四頁）に至つて次の記述がされており、歌を三期に区分する立場で、それが年号により述べられてゐる。

集中の歌を作者の詳末詳に關はず、通じて仮に前中後の三期に区分した。前期に奈良の遺製からはじめて天長頃までの作を統べ、中期に承和より仁和までの作を統べ、後期に寛平延喜の作を統べた。

「奈良の遺製からはじめて天長頃まで」や「承和より仁和まで」というのは、同書概説冒頭に書かれてゐる次の指摘を踏まえることでその設定の理由が明瞭となる。平城天皇の政治的敗退に關する葉子の変を経て勃興する漢詩文全盛期という当時の図式的な歴史観を踏まえて展開される記述である。

この時代における国歌は、衰微といふよりは寧ろ社会に忘却されたのであつた。「略」然るに幸にして風流宰相小野篁の出現を見た。「略」次いで仁明天皇の四十賀を行はれた時、興福寺の僧徒が五七の長歌を作つて言ほぎ奉つた。「略」蓋し歴史は浪打つ、国歌復興の氣運は人の氣付かぬ間に既に動いてゐたのである。

ここに国歌壇上の夜は明けた。黎明期は早くも旭日天に冲する花々しい朝となつた。殊に緇衣界には僧正遍

照の出現があつた。「略」これと同時に古今のすき者在原業平が、殆ど競争的態度で、非凡の才を振ひ、「略」復興の氣運は全く熟した。これ家持歿後殆ど二百年ばかりの事であつた。

この二家絶叫の反響として崛起した名家には、前に行平、小町、黒主、康秀等、のちに深養父、興風、貫之、躬恒、友則、元方、兼輔、忠岑、伊勢、千里、素性、定文等の歌仙達があつて、又この外の人々、「その名聞ゆる野辺に生ふる鬢カッラの這ひひろがり、林にしげき木の葉の如く」に多かつた。公私の歌合は頻々として催され、屏風の料の歌は各家の集中に必ず散見し、猷詠の命はしばしく下され歌字の研究もやうやくに興つて来た。これを寛平延喜の国歌中興の時代とする。

篁を先駆者とし、興福寺の僧徒たちを経て、遍照と業平、そして六歌仙やそれ以後の人たちを置くという人物で代表させる見方が示されている。そのため、三期区分としては「歌の分類」の立場を示しているが、それを詳細に指摘する時に人物の位置づけと不可分になっていることがうかがえる。そして、金子における三期区分は「仮に」とあるように便宜的なものだが、一期、二期、三期はそれぞれ後の「読人知らず」「六歌仙」「撰者」と全く同じである。しかし、二期と三期の区分は「国歌中興の時代」とあるように、歌合や屏風歌などの出来事によって示されているにしても、一期と二期は区分といえるほど明瞭でない。一期は「奈良の遺製」という万葉からの流れと密接なことが示されているが、二期への歌の変化は、篁の出現と仁明天皇四十賀における僧徒の長歌によって象徴的に捉えられている（この見方が後に示す島田説と大枠が変わらないことは研究史上重要であろう。ただし、金子は「国歌復興」の兆しとして、国風暗黒時代とされた時代に対する和歌という文脈でこの出来事を捉えている）。

まとめると、金子の三期区分に対する見方は、歌の区分でありながら、歌の詠者によって代表される時代の和歌

思潮を反映しているということが出来る。三期を「国歌中興の時代」とする点や、原文の圈点が付された箇所それが表れている。また、万葉との関連が指摘されているなどの文学史的視点を有しており、これは古今集内の歌のみを中心としていない立場であることを示しているといえる。

### 安田喜代門論<sup>〔八〕</sup>

金子に近い時代で著名な研究としては、安田喜代門のものが挙げられる。同氏の『古今集時代の研究』は表現分析の傾向が強い研究であるが、分析の前提に用いる年代区分は同氏の『口訳対照古今和歌集』を参考文献とした詠者の年代区分によるものとなっており、読人の明らかな歌について、次のような年代順に四期に配する見方を示している。まとめると以下のようなようになる。

- 一期 衣通姫から三国の町（代表としては小野篁）
- 二期 業平の母から貞登
- 三期 文屋康秀から藤原勝臣
- 四期 藤原忠行以下（古今集選定時に現存の人々）

これらについて、安田は二期、三期の代表を六歌仙（遍照、業平、小町、康秀、喜撰、黒主）とし、さらにこれを二分したのは「歌合によつた」と述べている（二四四頁）。その「歌合」とは何かを同書では明言していないが、『口訳対照古今和歌集』<sup>〔九〕</sup>の記述から推測するに寛平期に開催された歌合のことと思われる。だが、「四期とするより〔前

述した）二期と三期とを合せて近き世——すなはち六歌仙時代とし、全部を三期とする方が古今序の精神になつてゐるから、むしろ今はそれに従はう」とも述べて、安田独自の四期区分から一般的な三期区分にも妥協する視点をみせている。

一期に衣通姫などの上代人を含める立場は、これらを古今集以前とみなして古今集の時期区分から除外する他の区分論と異なる。上代人によって上代に詠作されたと目される和歌をも古今集の時期区分に含める点で古今集論として注目に値する視点を有している。また、二期、三期の区別が「歌合によつた」というのは、それらの「歌合」が寛平期の歌合のことと推測されることから、「近き世」の中でも四期に近い寛平期の歌合にもみえる人物とそれ以前の人物を分ける見方となつて<sup>10)</sup>いる。古い研究だが、分類が詳細な点は分析の視点として評価すべきである。

しかし、安田は四期区分よりも三期区分の方が「序の精神」にかなつてゐることも合わせて指摘していた。安田のいう「序の精神」、すなわち、古今集の仮名序に述べられた「いにしへ（古）」「ちか（近）き世」「いま（今）」の三期区分を尊重する視点は多くの研究が踏襲しているものである。特に安田もこの序を根拠に分析的な四期区分から三期区分へ妥協を示しているように、以後の研究には三期をより細分化した視点は引き継がれず、もっぱら三期が行われていることは、研究において重要な問題をはらんでいる。

なお、読人知らず歌については「古いのもあり、新しいのもある。それを類別する標準としては、題の知られるものと否とによるのである。題知らず読人しらずは概して古く、題の知られる読人知らずは概して新しい」（二九三頁）という見方が示されている。

読人知らずにおいて「題知らず」と「題の知られる」ものを区別する点も、単純な分類だが、その後の研究（例えば本稿第三節で扱う小沢の論）と比べて分析的態度といえるだろう。

以上のように、安田の分類は詠者の年代によっている。この点で、安田の研究における表現の年代は、詠者の年代を根拠として導き出される付随的な論になっていることが指摘できる。研究の視点における問題としては、詠者の年代は三期区分以上に詳細な分析が可能であるにも関わらず、それが「序の精神」によって妨げられていることがあげられる。安田の表現分析は後述する小沢正夫の研究でも参照されているが、同研究では上述の詠者に関する四期区分には触れられておらず、研究史上の問題点をそのまま引き継いでいる。

窪田空穂『古今和歌集評釈』<sup>(二)</sup>

金子の評釈と並ぶ戦前からの著名な古今集注釈に窪田空穂の著書がある。概説における三区分に關する記述は次のようになっている。

古今和歌集は、普通、年代順によつて三歌群に分たれてゐる。第一は、詠み人知らずの歌群である。これは古今和歌集としては混沌時代で、歌風としては直ちに万葉集に接したものとされてゐる。第二は、謂はゆる六歌仙時代の歌群である。これは混沌時代を去つて、古今和歌集の歌風が確立した時代とされてゐる。第三は、撰修時代の歌群である。これは六歌仙時代を進めて、その歌風を大成し、頂点にまで到達せしめた時代としてゐるのである。

窪田の論は、年代による三区分に伴う歌風変遷の分析に対して、従来の研究が疎略であったことを指摘するもので、三区分を「歌群」として捉えている点が注目される。例えば、読人知らずの歌については次のように記述している。

詠み人知らずの歌群は、本来は口唱されてゐた物で、口唱文学の特質としての流動を続けて来、最後に記録される時には、記録された時代、即ち撰修時代の歌風によつて可なりまでの改作を経たものでは無いかと思はれる。或は又、撰集時代と略々同時の作であつて、そこにある多少の差は、作者の社会的階級の差より来てゐるものでは無いかとも思はれる。

読み知らず歌に対して二つの視点が指摘されている。一点目は、撰集時代のもので社会的階級の差から名前のないものがあるという視点である。これは官位の低い人物においては往々にして名前を明かされないことが勅撰集にあつたとされることが元になっているのであろうが、詳しくは触れられていない。<sup>(二三)</sup>

重要なのは二点目で、古い歌でも、記録された時代の歌風によつてかなりの改作を経たものが含まれているのではないかという視点が指摘されている。本来は古い歌でも、時代を経て伝わると歌風、すなわち、表現からみて違う時期のものとして分類される可能性があるということである。

この視点は、詠者の年代や詠作時期の年代に対して歌表現の年代はそれへ付随するのではなく、独立した要素として考えられるとする見方になっている。すなわち、元は古い歌であっても、表現の年代が撰者時代と変わらないものが読み知らずにあることになる。ここにおいて、歌の年代は、従来の金子や安田の研究のように詠者の年代によつて示されるだけでなく、表現の年代という観点から区別できるという視点が示されているといえるだろう。窪田論における三分が詠者の年代や詠作の年代に付随したものでないことは、三分を「歌群」として捉えている点に表われている。

## 二、戦後期の研究

戦後の早い時期の研究としては、太田水穂と小西甚一の区分論が取り上げられるべきだろう（他にも同時代で年代区分に触れたものはあるが、それらは研究史上の説明を加える必要も認めにくいため、論末尾の表でのみ簡潔に記した）。太田、小西の両説はそれ以前のものとは結論が相違し、かつ、戦後以降に流布するものとも時期区分の枠組みやそれを支える発想が大きく異なっている。

### 太田水穂「六歌仙時代——万葉集より傾斜する一断面——」(一三)

太田の論考は六歌仙期の歌について語るものだが、読人知らずの位置づけが大きく異なることで知られ、秋山虔(一四)もこれを取り上げて年代区分論に問題を提唱した時期があつた。以下、太田論を引用する。

六歌仙時代といふものは、古今集前駆時代のその一部に過ぎないものであつて汎くこれを見渡すならば、桓武天皇から起こつて平城、嵯峨、淳和の漢詩文期四朝を経由し、仁明、文徳、清和、陽成四朝のいはゆる六歌仙輩出の時期に亘り、それよりさらに光孝、宇多両帝までを包容するものとすれば約百年がそれに相当すると見なければならぬ。

従来説のように、固定的に天皇の在位時期ないし年号や人物から三期を区別しているというよりは、段階的に移り変わっていくその動的な変化を「包容するもの」として漠然と捉えているとみるべきだが、六歌仙時代と読人知らず歌の関係については次のように述べている。

予の鑑賞は従来多くの人々の見解と異つてくるので、これ等読人しらず一群の歌をしばらくそれ等の説に依つて桓武四朝の後、六歌仙期の前へ入れて比較してみるとすれば、そこに安定しない無住を感じるのでもその事が分明しよう。

これを図示すると、次のようになる。

（国風暗黒時代）

万葉の後期 ↓ 六歌仙時代 ↓ （読人知らず歌） ↓ 撰者時代

太田が「六歌仙期の前へ入れて比較してみる」という「読人しらず一群の歌」とは、読人知らず歌「も、ちどりさへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく」（春上・二八）などを含む七首であり、これらが「古今集正雅の調」として挙がっている。それらは『日本後紀』などの歌や六歌仙の歌に続いて説明の中で掲げられており、表現の変遷からの指摘となっている。その意味で、研究史的には窪田が「歌群」として位置づけた視点を受け継いでいるといえ、詠者の位置づけが先行している論とは一線を画している。

太田の説を含んだ古今集の研究としては、後に宇佐美昭徳〔五〕のものがあり、巻の配列論と絡めて歌の年代性の検討を試みている。小沢、太田説に加え、次に述べる小西甚一の説を並べ「読人しらず歌の『歌風』として指摘するものを比較してみると、『準万葉風』（旧説（小西甚一他））から『古今集正雅の調』（太田氏）まで大変幅がある」として、これは読人知らずの時期の幅と関係があるのではないかと指摘する。

だが、太田論は、読者知らずの位置づけについて別説を述べているだけでなく、研究の視点として、詠者の年代とは別に表現の年代を考えている点が重要とみるべきだろう。

小西甚一校註『古今和歌集』<sup>二六</sup>

小西説は「古」「今」という大枠の中で各三期を位置づけるものである。同書「古今和歌集解説」では、次のような歴史的な視点が示されている。

平城天皇の御代あたりまでは、やはり万葉風の歌が続いてゐたやうである。然るに、嵯峨天皇の御代になると、情勢は急転した。といふのは、嵯峨天皇は非常な唐ごのみでゐられ、漢詩漢文をよほどご奨励になつたらしい。その結果、漢詩漢文が猛烈な勢で流行した反面、和歌はさつぱり振はなくなつた。次の淳和天皇から仁明天皇および文徳天皇の御代にかけても、この形勢は変らない。

こう述べた後、在位する天皇と対応する時期の図表を示している。簡潔にまとめると次のようになる。

- 一期 (淳仁、称徳、光仁、桓武、平城の五十年間) ↓準万葉時代(古)
- 暗黒時代 (嵯峨、淳和、仁明、文徳の五十年間) ↓(和歌中絶期)
- 二期 (清和、陽成、光孝の三十年)
- 三期 (宇多と醍醐の延喜五年までの二十年間) ↓古今集時代(今)

これらについて「第一期の歌は殆どすべて詠人よみひとしらずとなつてゐるので、この期を詠人不知時代ともいふが、第二期第三期にも詠人しらずの歌が少なくないから、適切なよびかたではない。また第二期を歌仙時代、第三期を撰集時代とよぶこともある」（八頁）とする。この読人知らずに関する視点も重要であるが、小西論は一期を古今集の歌の「準万葉時代」として前代の『万葉集』の歌と区分上区別していること、および一期と二期を連続として捉えずに仁明朝前後を「暗黒時代」として立てていることに特徴がある。

そして、特に注意したいのは、二期と三期に跨がる詠者の位置づけについてである。二期の人物として、次の人物を挙げている点が後の諸説と異なっている。

第二期には、他に、源融・在原棟梁・在原滋春・藤原敏行・菅原道真・大江千里などの歌人がある。これらの人たちは、幾らか第三期にも涉つてゐるのであるが、それだけに、歌風の差がいよいよ二七少ない。

これらは安田の研究の「六歌仙時代」の人物に当てはまるが、源融以外、後述する小沢が三期へ分類する藤原敏行などを全て二期とみなしている。つまり、小西論のように三区区分が用いられたとしても、内包する時期と人物が違ふことがみられる。これは各三期を設定することによって生じる問題であり、加えて各三期の中に誰を含めるか、詠者の年代を考える視点において常に起こりうる問題である。

なお、このような人物の分類とは別に、小西論は表現の問題として、二期の歌の特徴が「倚傍表現」にあることを述べ、一期の直截的な歌との違いも述べている。小西論において詠者と表現の両方の視点が述べられているところに、年代区分は詠者の年代なのか、表現の年代なのか、先行研究では曖昧な点が認められるのである。前述した

宇佐美論でも小西の研究が参照されているが、宇佐美が指摘する小西の読人知らずの枠組み自体は、宇佐美が捉えた「歌風」の話として深く分析しているとは言い難く、時期が違うという枠組みの違いを「準万葉風」ということばから歌風の問題として捉えたものに見受けられる。これは先行研究において歌に関わる年代の要素が極めて曖昧に捉えられているための影響とみることができる。

### 三、戦後期以降の研究

この時期の研究は研究史の上でも頻繁に取り上げられているが、冒頭で触れた小沢と島田の両説は、それぞれ別の主張をしているながら同じ雑誌の特集に載せられているという特徴があげられる。

『国文学 解釈と鑑賞』一九七〇年二月の誌上には小沢正夫「古今集入門」、片桐洋一「よみ人しらず時代——特にその古今集らしさについて——」、島田良二「六歌仙時代」が並んで掲げられており、年代区分に関わる点で相互に立場の違いが示されていることは、研究史の上で区分論それ自体が問題を孕んでいることを示しているが、ここでは研究史上のそれらの扱いを示したものとして、小沢、島田の両説を端的にまとめている鈴木宏子<sup>〔九〕</sup>の文章と、その箇所<sup>〔五〕</sup>で付された注(5)を引用する。

小沢正夫氏の把握によれば、第一期は嵯峨天皇の即位した大同四年(八〇九)から仁明天皇の治世である嘉祥二年(八四九)まで。文章経国思想を掲げて『凌雲集』『文華秀麗集』(以上嵯峨朝)『経国集』(淳和朝)の三つの勅撰漢詩集が相次いで編まれた、国風暗黒時代とも唐風謳歌時代とも称される時期である。

〔5〕〔略〕なお各期の線引きには異なる見解もある。たとえば島田良二氏『古今集とその周辺』（笠間書院、一九八七年）は仁明朝（八三三年～八四九年）を六歌仙時代に繰り込む。〔略〕平沢竜介氏『古今集』の和歌―読人しらず時代の歌から撰者時代の歌へ―（『王朝文学の始発』笠間書院、二〇〇九年）は諸説を検討した上で「基本的には小沢の分類に従う」とする。

鈴木は文学史の視点としてこれらに触れており、小沢と島田の両説の違いは、六歌仙期に仁明朝を含めるか否かにあるとされている（なお、鈴木は島田の見方だと「六歌仙時代があまりにも長期になり、かえって和歌史の動向が見えにくくなる」として小沢の説を用いている）。しかし、問題の要点はその「線引き」にあるのではない。それぞれの研究の立場、視点の違いこそが指摘されるべきであろう。以下、これを具体的に確認する。

小沢正夫論

小沢の年代区分は小学館日本古典文学全集（以下〈全集〉とする）<sup>(10)</sup>などで示されており、全集解説では次のようになっている。

	時期区分	期間	天皇
I	読人しらずの時期	大同4年(809)～嘉祥2年(849)	嵯峨、淳和、仁明
II	六歌仙の時期	嘉祥3年(850)～寛平2年(890)	文徳、清和、陽成、光孝、(宇多)
III	撰者たちの時期	寛平3年(891)～天慶8年(945)	宇多、醍醐、朱雀

小沢は各期を詠作者でも示している。一期は小野篁・藤原関雄を代表させ、古今集の読人知らず歌が増加して『万葉集』の歌に比べて質が変化したのはこの時期とし、これを古今集時代の初めとする（後述）。二期は篁や関雄が没して六歌仙が出てきた時期で、六歌仙遍照の死をもって終わりとする。三期は貫之らが宮廷に進出しはじめた宇多天皇の寛平年間頃を始まりとし、古今集撰者の晩年の著作に壬生忠岑『和歌体十種』があることから、同書の成立と貫之の没年が天慶八年（九四五）のため、この年を三期の終わりとする。一期では『万葉集』との関係、三期では古今集以後の年代を内包するなどの文学史的視点が示され、その点は他の論と比べて特徴的なものであるといえる。

そのために注意すべきは、一期より前の時期、すなわち八〇九年以前の扱いである。「読人知らず」の歌は一般的に一期のものともなされる傾向にあるが、小沢は一期以前の詠作もあるという見方を示している。小沢の著書『作者別年代順 古今和歌集』にも分類項目として「上代と第一期の歌人」と立ててあることは、この見方が前提にあるためだろう。全集では「集中に四百五十首ほどとられた読人知らず歌の中には奈良朝の作と思われるものも少なくない」「平安最初期の桓武・平城時代の歌は、まだ『万葉集』の調べとほとんど同様であったと考えてよからう」と述べている。一期については、「古今集」の読人知らず歌の数が増加し、質がやや変化したのもこの時期（嵯峨朝）以後であろう。したがって、嵯峨天皇の時代を和歌において何らかの新機運が動きはじめた時とみて、そのころを古今集時代の初めとしたい」として、嵯峨天皇以前（≡平城天皇までの時期）とそれ以後とを区別しているのである。つまり、平城天皇の時代までの歌を「古今集以前」の歌として捉えていることになる。

このような見方に関連して小沢『古今集の世界』<sup>(三)</sup>は次のように述べている。

『古今集』の歌で用いられる序詞の数は読人知らず歌に一番多く、六歌仙時代に減少し、撰者時代にふたたび増加する。私はこの事実を六歌仙時代には序詞のような古い修辭技巧が顧みられず、縁語・懸け詞・見立てのような新しい修辭に関心がもたれ、これに反して、撰者時代には古い修辭が復活し、それと縁語・懸け詞・見立てなどのいわゆる古今的技巧とが総合融和されたのであると解釈したい。

『万葉集』にも多くみられる序詞の傾向が、表現の年代性と絡めて指摘されている。ただ、小沢論は「平安時代の初期の人で『古今集』に歌を残している人も少しはあるが、そのころの歌は集中の読人知らず歌によって代表される」として、同書（九〇頁）で多くの読人知らず歌を平安時代初期のものともみなしている。この認識が一般に「第一期＝読人知らず」と認知される原因であるといえるだろう。

このように小沢論は分析の手法として、歌の表現から年代性を分析しつつ、分類としては詠者により年代性を代表させている点の特徴である。そしてそれは、先の表に示したように年号でも示すなど、従来の研究を踏まえ、総合して新説を確立している。それ故に広く用いられるだけの妥当性を錯覚させるものがあるということが出来る。

しかし、最終的に篁や遍照や貫之などの人物によって各期を代表させているところなど、表現の年代だけでなく詠者の年代による区分となつている箇所が見受けられるのである。実際、小沢は『作者別年代順古今和歌集』において、詠者を各三期の年代別に並べている。この表現の年代と詠者の年代の混同は、小沢の研究を用いる時に注意を要する。

### 島田良二説

島田説は六歌仙期に仁明朝を含める立場であるが、その理由を当時の社会背景と関連付けさせている。

仁明天皇を六歌仙時代に入れたのは、この天皇の御代の承和五年（八三六）に、小野篁が遣唐副使として乗船を拒み、隠岐に配流された事件があり、また、藤原良房が嘉承元年（八四六）に右大臣となり、翌二年に仁明天皇の宝算四十賀を興福寺で催し、僧侶に長歌を奉らしめたという史実があるからである。

平野由紀子<sup>(11)</sup>は「島田説では仁明朝の二つの出来事〔傍線箇所〕に前代と異なる変化の本質を見る」としてこの説を用いている。ただ、島田説はこれに加えて「仁明天皇の御代には、遍昭は出家せず、その間に歌を詠んでいるし、小町・業平も多感な青年期を過し、恋歌を詠んでいたと想像される」とも述べており、一般化された人間像が前提となっている点に注意を要する。論考内では、そのような人物像に触れて詠者の年代を深く関わらせているのである。島田の論考はその上に立って歌の変遷を位置づけるものとなっており、小沢による歌の表現分析に深く立ち入った視点からの年代性の指摘とは性質が大きく異なる。そのため、小沢論と対置されるほどの規模と緻密さをもつ研究とは言い難い。また、この大枠自体は既にある金子の見方と一致しており、研究史としてはそれがまず触れられるべきだろう。

ただ、島田の立場は金子のような文学史的な視点というより、社会の中でみるという歴史社会学的視点から展開されている視点であることは重要である。時代が先にあり、その中に人物が放り込まれ、その中に歌があるという論の骨格になっている。人物ではなく出来事として篁配流と興福寺の僧侶の長歌を捉えようとしている点にその立場の違いがうかがえる。

小沢と島田の研究は、それぞれ表現の年代、詠作の年代という別の要素を基準としていながら、それを詠者の年

代へ関わらせているために、結果として二期目の時期の違いとそこへ分類される詠者の違いとして比較されることになっている。ただ、この相違は表現の差違によるものでないため、当然ながら歌表現を論じる上での本質的な相違とはいえない。

例えば平沢や鈴木や平野も、両説の長短を指摘した上で歌表現の論考で各年代区分論を援用しているが、両説の本来の性質を深く捉えた議論が行われているとはいえない。先行研究における年代区分論を援用するにしても、「歌」の論考としては、窪田や太田のように、表現の分析的観点から年代がどう捉えられるかを示すべきであり、その観点から年代区分をどう用いることができるかといった視点が必要だろう。先行研究による年代性の捉え方は、表現や詠作や詠者の年代の三要素の混同に発端する問題がみとれるのである。

### 片桐洋一説

片桐説は表現に即した視点を有しているが、そのために部分的に諸説と見解が異なっている。

まず、片桐は年代性の追究を不毛とする立場を示している。<sup>二四</sup>古今集は「その名のごとく『古』い歌と『今』の歌とが一体となって構成せられた歌集」だとし、「今」が撰者時代を指すとして、六歌仙時代は「近代（ちかき世）」とする序から撰者と近い側に捉えられていたとみながらも、「古」について次の見方を提示する。

古今集のよみ人しらずの歌は、万葉集と重なる頃の歌もあるし、もつと後の歌もある。だが、そのような詮索は、実はどうでもよいのだ。大切なことは、それらが、古今集の「古」の部分にない、しかも、その「古」の部分「古」でありながら、前述のごとく、まさしく古今集的表現をなしているということのほかにはない

のであると。

これは古今集が享受された後の時代の視点としては有効だが、古今集の成立や古今集内の歌をその作られた時代に即して考察する時には、完成された古今集像から演繹するという方法になる問題がある。特に古今集が「古今」とある以上、「古」と認識され得るものが何かということはある必要があるだろう。

なお、片桐は全評釈<sup>(二五)</sup>において、通説とことわって三期区分を概説してその中で表現を論じているが、その枠組みにおいて二期に仁明朝を含め、三期に元慶年間を含めるのは他の諸説と異なっている。この視点では、二期と三期に跨がる藤原敏行などを三期へ繰り込みやすくなるが、前節の小西論の箇所指摘したとおり、年代を設定することによる各人の位置づけは常に問題となる。

以上のことからして、年代区分論においては、時期の違いみならず二期と三期の詠者の位置づけ、読人知らずの捉え方などに相違のあることがわかるが、それ以上にそれぞれの立場や視点がそれほど分析されておらず、表面的な違いのみが指摘されて、通説的な解釈を述べているようにみせかけつつ、詳細にみると別説を立てている傾向が全体的にみられる。

研究史として俯瞰した時に見られるこのような相違は、各研究が「年代」や「読人知らず」といった語のもとに曖昧に解釈して説明ないし論じているところに発端するものであろう。つまり、「年代」といっても、年代設定そのものの違いだけでなく、表現の要素、詠者の位置づけの要素などが厳密に区別されていないために起こっている問題である。これは、三期区分そのものの妥当性についての問題にもつながる。

ここでいくつかの視点から主要な年代区分論を分析したが、年代区分を定義する時、それが詠作の時期を中心に定義されたものなのか、詠者の年代を基準に設けたものなのか、あるいは歌表現の自立した年代性からそれらに問題を提示しているものなのか、といった違いが見受けられた。このような要素ないし三つの視点は、研究を分析的を行う場合、つまり区分の前提を考える上では混同されてはならないものである。

#### 四、「詠者の年代」「詠作の年代」「表現の年代」の三要素

前節までにおいて先行研究を整理したが、その多くは注釈書の巻頭などに掲げられる概論的性質のものであることもあり、包括的内容にならざるを得ない点で、年代性について具体性を欠いた分析をしている論考が見受けられる。

この節では、分析中に示した年代区分を考える上で重要となる「詠者」「詠作」「表現」の年代の各要素が、古今集内において三期区分を設けることとの関わりでどのようにみられるか、その問題点とともに具体的に述べることにする。三期区分の定義については、広く用いられている小沢論を基準に批判を加えることとした。同論は全集を通じて広く流布しているのみならず、諸説の中においては相当に分析的視点を有しており、これを中心に具体的な年代定義の妥当性と問題点とを検討することで、建設的な議論が可能になると考えられるためである。

小沢は『古今集の世界』での表現分析を下地とし、『作者別年代順 古今和歌集』に結実して、詠者によって古今集全歌の年代を分類している。つまり同研究は詠者による年代の分類の結果を示している。詠者の分類基準について、同書は凡例で「作者の配列は没年のわかる限りその順序に従い、わからぬ者は妥当と思われる位置に置いた。作者ごとの和歌の配列は、年代の判明するものを年代順に掲げ、その後年代不明の歌を掲げた」とする。同書において、詠者の各三期への分類は没年を原則とすることが記されている。だが、これに従うと分類された「詠者の

年代」と、その人の「詠作の年代」とで異なる年代区分に当てはまり、年代の相違する例が散見されるのである。

まずは三期の人物で二期の歌の例を指摘する。小野春風は三期に分類されるが、その歌「あまびこのをとづれじとぞ今は思ふ 我か人かと身をたどる世に」(雑下・九六三)の詞書には「左近将監とけて侍りける時」とある。これは『藤原保則伝』<sup>(二七)</sup>の「前の年頃に讒謗に遭ひ、官を免たれて家居せり」から元慶元年(八七七)の歌とみなされているが、この年は小沢の区分では二期となる。

また、藤原敏行は三期に分類されているが、次のように在原業平(元慶四年没で二期)と贈答を交わしている。

なりひらの朝臣の家に侍りける女のもとによみてつかはしける

としゆきの朝臣

つれづれのながめにまさるなみだ川袖のみぬれてあふよしもなし

かの女にかはりて返しによめる

なりひらの朝臣

あさみこそ袖はひづらめ 涙河身さへながるときかばたのまん

(恋三・六一七、六一八)

他にも業平の歌の詞書に「藤原敏行朝臣のなりひらの朝臣の家なりける女をあひしりて」(恋四・七〇五)とあり、敏行は二期の人物と交流し和歌を詠んでいることがわかる。このような例があるが、同書は詠者を基準に歌を分類するため、この類の詠者名の歌は分類上三期となる。ただ、三期とされている人物には文室有季のように「貞観の御時、万葉集はいつ許つくれるぞとはせたまひければ、よみてたてまつりける」の詞書(雑下・九九七)から二期の詠作のみ残る人物もいる。

詞書には「貞観の御時」というような歌の詠まれた年代を示しているものがあるが、これは何が起こったかという時代の思潮、出来事と関わっている。例えば、社会における事件として、篁が配流された出来事を二期の年代の重要なものとする見方は金子や島田によってされているが、古今集の詞書以下に「おきのくににながされける時に、ふねにのりていでたつとて、京なる人のもとにつかはしける 小野たかむらの朝臣（羈旅・四〇七）」とある時、この出来事は史書の記録などと合わせて、歌の年代を決定ないし象徴することになる。後で詳しく論じるが、詞書で示される歌合などもいつの時代のものであるという情報を含んでおり、これらは「詠作の年代」が示されているといえるだろう。先行の年代区分論において指摘されていた天皇の在世時期や年号の情報、歌合の隆盛や配流のような出来事といった要素は、古今集の歌集の要素から考えると詞書が示す「詠作の年代」に還元することができる。この「詠作」と「詠者」の年代の不一致は、三期区分を設けることによって顕著となる。このような例があるため、三期の人物で詠作年不詳の歌は、小沢の定義する三期（寛平三年（八九一）以降）か二期かを明確にできないという問題が発生する。

先に示した小野春風は没年不明だが、経歴からは昌泰元年（八九八）従五位下であり、それ以後に亡くなったとみるのは「妥当」といえる。これは凡例にいう「人物の没年」に合わせた分類であり問題は小さい。しかし、同書には没年基準の原則に当てはまらない人物が多々みられる。次に掲げる二期の人物で三期の歌を有する例がそれに該当する。

大友黒主は六歌仙で二期に分類される。だが、年代の判明する歌は「これは今上の御べのあふみのうた」の左注を有する「あふみのやかゝみの山をたてたればかねてぞみゆるきみがちとせは」（大歌所御歌・一〇八六）一首のみで、寛平九年十一月醍醐天皇大嘗会の詠作である。「今上の御べ」（今上天皇の大嘗会）の記載からすれば大友黒

主の没年はこれ以後の三期となる。黒主は古今集の序に記される六歌仙の一人であり、二期とすることは適切に思われるが、この場合における分類の「妥当」性は歌から推定される没年ではなく、活躍年からということになる。

しかし、歌の事績に特徴ない人物では問題が複雑となる。上毛野岑雄は二期の人物とされるが、歌は三期に当たる藤原基経没時の次の一首のみである。

(ほりかはのおほきおほいまうちぎみ、身まかりにける時に、ふかくさの山に  
昭宣公)

おさめてける後によみける)

寛平三年正月癸 五十六 太政大臣關白始

深草の野邊のさくらし心あらばことしばかりはすみぞめにさけ

(哀傷・八三二)

かむつけのみねお（を）  
孝雄

同書の「作者略伝」には『古今和歌集目録』は承和(八三四)ころの人とするが、寛平三(八六二)年藤原基経の死に際して哀傷歌を詠んでいるから、生年が承和ごろかと推定される」とある。確かに『古今和歌集目録』には「上野岑雄一首。承和比之人」とあり、この人物は活躍期(小沢の見方では生年)により分類されている。しかし、没年は詠作年次以後となるはずだが、その可能性は考慮されていない。黒主を含めたこれらは同書凡例にある「没年のわかる限り」から外れ、生年や活躍期によって「妥当」性の判断がなされている。つまり、小沢の研究だけみても、詠者分類に没年と生年(あるいは活躍年)という二つ以上の基準が用いられており、分類が徹底されていないのである。古今集での詠作年次から没年が想定できるにも関わらず没年基準に従わないことは、この基準が同書におい

て絶対的な原則とはなっていないことを示している。これは同書の「詠者の年代」における重大な問題点といわねばならない。

小沢論を基準に詠作の年代と詠者の年代とが相違する人物を掲げると、少なくとも十三人、一期の小野篁、二期の藤原高子、上毛野岑雄、源能有、大友黒主、三期の小野春風、藤原勝臣、文室有季、幽仙、承均、藤原敏行、素性、藤原後蔭は時期を跨ぐことになる。<sup>〇六</sup> 歌数の少ない人物にも年代相違はみられるため、生没年不明の人物を含めれば実数はさらに増えるであろう。他にも、同論を基準にすると、没年が分類された時期の次の時期にあたっている一期の藤原関雄（仁寿三年〔八五三〕没）、源常（斉衡一年〔八五四〕没）、広井女王（貞観元年〔八五九〕没）、二期の在原行平（寛平五年〔八九三〕没）、源融（寛平七年没）、小野滋蔭（寛平八年没）、惟喬親王（寛平九年没）、源能有（寛平九年没）、安倍清行（昌泰三年〔九〇〇〕没）、矢田部名実（昌泰三年没）、三期の紀淑人（天曆二年〔九四八〕頃没か）などがみられる。

先行研究では小沢の詠者分類に従って歌を「三期の歌」などと一括しているものがあるが、小沢論の詠者の年代が詠作の年代との齟齬のみならず、没年によっても多く原則に従っていないことからして、これを用いることには検討を重ねなければならない。

以上のような年代相違は、一つに「詠者の年代」そのものの設定の不備であり、二つに「詠者の年代」と「詠作の年代」との相違により起こる問題である。後者についていえば、そもそもこの両者は分類基準が異なり、区別されるべきものである。両者の相違は特に歌合の歌などにおいて問題となる。

これさだのみこの家の哥合のうた

文屋やすひで

吹くからに秋の草木のしほる(ま)ればむべ山風をあらしといふらむ  
 草もきも色かはれどもわたつうみの浪の花にぞ秋なかりける

(秋下・二四九、二五〇)

文室康秀は六歌仙で二期とされている。「是貞親王家歌合」は寛平五年九月以前の開催(二五)と推定されているが、古今集に収載される同歌合の詠者名には、他に大江千里(一九三)、壬生忠岑(一九四)、藤原敏行(一九七)、紀友則(二〇七)が挙げられ、康秀以外全て小沢が三期に分類する人物であり、詠者からすると同歌合は三期的なものであることをうかがわせる。だが、小沢論では詠者によって歌を分類するため、「是貞親王家歌合」には二期康秀と三期の詠者の歌という別々の年代性の歌が存在することになる。そのため、詠者の年代で基準を立てずに詞書を示す年代から時期を定める見方も考えられるが、次に掲げる読人知らず歌はこの「是貞親王家歌合」という詞書による「詠作の年代」に基準を置くと三期頃の歌となる。

いつとは時はわかねど 秋の夜ぞ物思ふことのかぎりなりける

(秋上・一八九)

奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿のこゑきく時ぞ秋はかなしき

(秋上・二一五)

秋ぎりはけさはなたちそさほ山のは、そのもみちよそにてもみん

(秋下・二六六)

いろかはる秋のきくをばひととせにふたたびにほふ花とこそみれ

(秋下・二七八)

秋なれば山とよむまでなくしかに我おとらめやひとりぬる夜は

(恋二・五八二)

しかし、「いつはとは」（二八九）は『小町集』（四二二）、「奥山に」（二二五）は初句を「秋山に」として『猿丸集』（三二九）にもみられ、周辺歌集を含む問題としてこれらが三期的にみなされたとはいいきれないことをうかがわせる。当然、古歌を詠出したりそれを歌合に提出したりなど、「詠作の年代」（披露の年代を含む）は新しいがその歌の「詠者の年代」や「表現の年代」が古いこと、もしくは古歌がさらに新しく詠みかえられることはあり得るわけで、歌の年代性においては、このような多重性を背後に考えるべきである。古今集で古風とみなしうる表現には、『万葉集』にもみられる「雪はふりつつ」句を有する「きみがため春の野にいでてわかなつむ我衣手に雪はふりつ、」（春上・二一・光孝天皇）や、「さらさら」に「よるづよまでに」句を有する「美作やくめのさら山さらさらにわがなはたてじよるづよまでに」（大歌所御歌・一〇八三）などが挙げられる。次の貫之の歌も大部分で古歌の句を踏まえている。

道しらばつみにもゆかむすみ<sup>（一）</sup>のえのきしにおふてふ戀わすれぐさ

（墨滅歌〔恋四〕・一一一一・紀貫之）

暇有者 拾尔将往 住吉之 岸因云 恋忘貝

（『万葉集』卷七・二一四七）

このような古歌と類似する表現の歌は、「表現の年代」が「古」と通ずるといえる。これらの年代性は「きみがため」（二二）、「道しらば」（二一一）が「詠者の年代」から二期と三期で、「美作や」（一〇八三）が「詠作の年代」から二期（貞観元年一月清和天皇大嘗会）の歌とみなせるが、それぞれの時代に古い表現を踏まえているのであり、三要素のどの部分に比重を置くかによって、歌の見方が変わってくるものである。

歌合の歌に話を戻すと「吹くからに」（二四九）は詠者を康秀の息子朝康とする清輔本や雅経本などがあり、契沖『古今余材抄』<sup>（二）</sup>が康秀では年代が合わず、元は朝康の歌かとみている。これは「詠作」と「詠者」の年代の相違

と密接に関係する問題と考えられ、朝康が親の歌、家の古歌を提出したような場合には、康秀の歌だが朝康の歌とみなされたことがあり得るだろう。

歌の場を考えると、古歌詠出や歌合など「詠作の年代」と「詠者の年代」は相違することが起こる。また、あらゆる場において世代の違う若年と老年の詠者が同席することや、詠者が古歌の句を詠ずることはあり得るわけで、表現を問う時に歌の年代性を「詠作の年代」だけで位置づけることが適切ともいえないはずである。

### 結語

本論では先行研究を整理して問題点を掲げ、具体的に年代性を考える時には次の要素に分けて考えるべきことを示した。即ち、

- ① 詠者注記等から判断される「詠者の年代」
- ② 詞書等から判断される「詠作の年代」
- ③ 歌句表現等から判断される「表現の年代」

の三つである。「詠者の年代」と「詠作の年代」を三期区分に適応すると、前節で確認したように両方の年代が相違する場合があるが、そもそも「表現の年代」を含めてこれら三つの年代性は元来別のものである。先行研究の多くはこの点を曖昧に捉えている。それが年代区分論における第一の問題である。本論ではこれを整理した。

先行研究とこれらの三要素との関係をまとめると、次のようになるだろう。

【表 古今集の年代区分論一覽と年代性の三要素との関わり】

（表では、各三期に相当するものをそれぞれローマ数字でⅠ、Ⅱ、Ⅲとした。立場について、表現に即した立場の顕著なものは「表現史」、和歌の文化、風土などを包括して捉えているものは「和歌史」とし、和歌に留まらず、広く文学の流れを捉えていると見受けられるものは「文学史」的視点とした。）

研究者 (発表年)	区分	各期の年代	立場	区分の基準(三要素との関連)	読人知らずの扱い
金子元臣 (一九〇一)	三期	Ⅰ 奈良時代、天長年間頃 Ⅱ 承和、仁和 Ⅲ 寛平・延喜	文学史・ 社会史的 視点	年号による区分(詠作の年代) 各期を人物でも代表させる (詠者の年代)	独立した期にはしない。 三期それぞれの中にあるとする。
安田喜代門 (一九三二)	四期 (序に従え ば三期)	Ⅰ 衣通姫から三国の町(Ⅰ) Ⅱ 業平の母から貞登(Ⅱ) Ⅲ 文屋康秀から藤原勝臣(Ⅱ) Ⅳ 藤原忠行以下(撰者含む)(Ⅲ)	人物によ る視点	人物による分類(詠者の年代) 2、3の区分は歌合の時期に よる(詠作の年代)	詞書から新旧を区別 する。
窪田空穂 (一九三五)	三歌群	Ⅰ 詠み人知らずの歌群 Ⅱ 六歌仙時代の歌群 Ⅲ 撰修時代の歌群	表現史的 視点	歌風による分類(表現の年代)	作者の社会的階級の 差があるものがある。 撰修時代に改作され たものを含む。
西下経一 (一九四八)	(明瞭に三 期を示さ ない)	Ⅱ 嘉祥、仁和(「いはゆる六歌仙 の時代」)	和歌史的 視点	歌風と文化的な側面の双方が 混ざっている(表現の年代・ 詠作の年代)	

谷鼎 (三〇四) (二九四九)	二期 (詳細には 三期)	A「短歌衰微の時代」(暗黒時代、 六歌仙時代) I 七六〇年頃(万葉集の最後) ～八四〇年頃(業平若年)(仁 明まで) II 文徳～光孝まで B「短歌復興の時代」 III 宇多、醍醐	和歌史的 視点	Aは歌風(表現の年代) Bは歌合の開催などの社会文 化的側面(詠作の年代)	歌風から第二期と第 三期の間におく。
太田水穂 (二九四九)	三期	I 桓武、平城、嵯峨、淳和 II 仁明、文徳、清和、陽成 III 光孝、宇多	表現史的 視点	歌風による変遷(表現の年代)	第一期と第二期の歌の違 いは「倚傍表現」に よるとする。
小西甚一 (二九四九)	三期 (大きくは 二期)	A「古」 I 淳仁～平城 *暗黒時代 嵯峨～文徳 B「今」 II 清和～光孝 III 宇多～醍醐	文学史的 視点	天皇の在世期間による区分 (詠作の年代) 一期の直截的歌風、二期の「倚 傍表現」(表現の年代)	第一期と第二期の歌の違 いは「倚傍表現」に よるとする。
佐伯梅友 (解説西下経一) (二九五八)	三期	I 初期(ならのみかど〔平城天皇〕、 菅野高世、小野篁など) II 中期(六歌仙時代) III 後期(撰修時代)	人物によ る視点	解説内「作者」の項で説明(詠 者の年代)	第一期に含める。
小沢正夫 (三六六) (二九六一)	三期	I 嵯峨、淳和、仁明 II 文徳、清和、陽成、光孝、(宇多) III 宇多、醍醐、朱雀	文学史的 視点	表現による区分(表現の年代) 各期を人物でも代表させる (詠者の年代)	第一期に含める。
島田良二 (二九七〇)	(三期が前 提)	II 仁明～光孝	社会史的 視点	歴史的背景による区分(詠作 の年代)	第一期に含める。

新井栄蔵 <small>(三七)</small> (一九九八)	二期	A 前期（光孝の治世まで（八八七 年以前） B 後期（宇多の治世以後（八八七 年以後）	和歌史的 視点	寛平后宮歌合、『新撰万葉集』 『句題和歌』から宇多の治世 で前後期を分ける（詠作の年 代） 前期は小野篁と六歌仙、後期 は藤原敏行、素性と撰者を代 表させる（詠者の年代）	読人知らず時代以外 のものあるとする。 片桐（一九七〇）は 三期の中に位置づけ ない。
片桐洋一 (一九九八)	三期 (大きくは 二期)	A 「古」 I (左注歌などにより、奈良) 平安初期に限られないとする B 「今」 II 仁明初期、清和あたりまで III 元慶年間	表現史的 視点	通説に立ったとする上で、表 現の変遷を指摘（詠者の年代・ 表現の年代）	読人知らず時代以外 のものあるとする。 片桐（一九七〇）は 三期の中に位置づけ ない。

表の「区分の基準」から分かるように、細部で三要素を混同した年代論が見受けられる。

次に、三要素の混同のみならず、「区分」と「各期の年代」をみると、年代区分の示す時代観がそれぞれで相当に異なっていることもわかる。三期区分は安田がいうように古今集の序（特に仮名序）にかなったものとみなされておられ、多くの研究はその「古」「近き世」「今」から三つの時代区分を用いているが、先行研究では谷鼎、小西甚一、片桐洋一など、三期区分の上位に二期区分をみるもの、新井栄蔵のように二期区分のみを設けるものもある。これらは「古」「今」の認識と関わってくる。しかし、小西と片桐は「古」と「今」の中で六歌仙期を「今」に位置づけているが、谷の六歌仙期に対する見方は両者とは異なっており、これは六歌仙期にあたる時代を「前期」に位置づける新井の見方と等しいのであって、先行研究においては「古」「今」の二期区分における六歌仙期の扱いにつ

いても見解が分かれている。

このことから、古今集歌の時期区分のやり方として三期に区分すること自体がそもそも妥当かという問題も当然考えなければならぬ。特に「古」「今」の二期区分についても再検討の必要があろう。仮に古今集の序に示されているとされる三期区分を考慮するのであれば、詳細な表現や詠者の年代の分析の結果が三期区分と関連してどのように表われているか、または三区区分をどう捉え直せるかという方向で考えるべきである。だが、そもそも三期区分が序のいう年代区分と等しいかという具体的検討がなされる必要がある。つまり、「古」「今」が何かということ、年代区分観そのものの認識の整理が重要になってくる。これが第二の問題である。

最後に、代表的な年代区分の研究である小沢論では、三期を厳密に設定しているにも関わらず、人物の年代比定の「妥当」性の判断において、三期への分類基準が生年、没年、活躍年など分かれており、論として一定していなかった。詠者がどの年代の人物かの批判もなされずに小沢論などの先行論が利用される傾向にあるのは研究において改善を要する点である。他にも、人物がどの時期に当るかは第二の問題とも関わるが、安田や小西説における二期の人物が、小沢論では三期になっているなどの問題もある。詳細に人物の年代の視点から分析するならば、安田のように四期区分なども想定でき、生年を基とした世代的な違いをも含めて考察することが可能である。このように詠者の年代比定が第三の問題として残されている。

本稿において先行する年代区分論そのものの問題を確認し、整理した今、そもそも三期の区分が妥当かという視点と、詠者の年代の再検討という二つの問題について、より具体的に論じる必要があることが明らかとなった。この点について次稿で展開する。

- 〔一〕 平沢竜介や鈴木宏子、平野由紀子の論考。諸論の所在は本論第三節引用論文内注（5）、本論の注（一九）、注（二三）参照。
- 〔二〕 注（二〇）参照。
- 〔三〕 注（二二）参照。
- 〔四〕 金子元臣『古今和歌集評釈』（明治書院 一九〇一〜一九〇八年、昭和新版 一九二七年。引用は後者による）。
- 〔五〕 古今集の序文に「古」「近き世」「今」と、漠然とだが時代を指す語があることはよく知られている。
- 〔六〕 藤原定家『近代秀歌』に「およばぬ高き姿を願ひて寛平以前の歌にならば」とあり、賀茂真淵『古今和歌集打聞』にはしばしば「弘仁の比などの人の歌さまなるべし」といったことばがみえ、年代による歌の「姿・さま」に違いがあるという見方は、古からされている。
- 〔七〕 傍点、圏点は原文による。
- 〔八〕 池田正俊・安田喜代門『口訳対照 古今和歌集』（中興館 一九二九年）の他、安田『年代順作者別 古今和歌集』（春陽堂 一九三二年）、安田『古今集時代の研究』（六文館 一九三三年）などがある。
- 〔九〕 同書『古今集概説』。
- 〔一〇〕 注（九）も参照。
- 〔一一〕 窪田空穂『古今和歌集評釈』（東京堂出版 一九三五年、改訂版 一九六〇年）。
- 〔一二〕 『詞花和歌集』（雑下・三七二・西行）の「身を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ」が読人知らずとされている話がこの例としてしばしば指摘される。
- 〔一三〕 太田水穂『日本和歌史論』中世篇（岩波書店 一九四九年）。
- 〔一四〕 秋山虔『六歌仙時代とは何か』（国文学 解釈と教材の研究）二八一―九 一九八三年七月）。
- 〔一五〕 宇佐美昭徳『読人しらず歌』（古今和歌集論 万葉集から平安文学へ）笠間書院 二〇〇八年 第二章）。
- 〔一六〕 小西甚一校註『古今和歌集』校註国文学叢書44（講談社 一九四九年）。
- 〔一七〕 同書解説内「歌風の特徴と代表的歌人」。
- 〔一八〕 注（九）の文献参照。安田のいう第二期と第三期である。
- 〔一九〕 鈴木宏子『古今和歌集』の文学史（秋山虔『平安文学史論考 武蔵野書院創立90周年記念論集』武蔵野書院 二〇〇九年。のち鈴木宏子『王朝和歌の想像力―古今集と源氏物語―』笠間書院 二〇一二年。引用は前者による）。

- (二〇) 小沢正夫校注・訳『古今和歌集』日本古典文学全集7（小学館 一九七一年）の前に小沢正夫『古今集の世界』（塙書房 一九六一年、増補版 一九七六年）があり、その成果は小沢正夫編著『作者別年代順 古今和歌集』（明治書院 一九七五年、増補版 一九九〇年）に結実している。
- (二一) 同書、一三三頁。
- (二二) 島田良二『六歌仙時代』（のち『古今集とその周辺』笠間書院 一九八七年）。
- (二三) 平野由紀子「仁明朝の和風文化と六歌仙——掛詞・物名・竹取物語——」（増田繁夫・小町谷照彦・鈴木日出男・藤原克己編『古今和歌集の生成と本質』古今和歌集研究集成第一巻 風間書房 二〇〇四年。のち平野由紀子『平安和歌研究』風間書房 二〇〇八年）。
- (二四) 片桐洋一「よみ人しらず時代——特にその古今集らしさについて——」。園点は原文による。
- (二五) 片桐洋一『古今和歌集全評釈』（講談社 一九九八年）。
- (二六) 「凡例」（小沢「作者別年代順 古今和歌集」）。
- (二七) 三善清行「藤原保則伝」（『古代政治社会思想』日本思想大系8 岩波書店 一九七九年 六七頁）。
- (二八) 八〇九年以前の人物である衣通姫、あめのみかど、近江采女、柿本人麻呂、中臣東人、阿倍仲麻呂、橘清友の七人は時代が大きく異なるため、ここでは省いている。
- (二九) 萩谷朴編著『平安朝歌合大成』増補新訂 第一巻（同朋舎出版 一九九五年 三一頁）。同歌合は撰歌歌合と考えられている。
- (三〇) それぞれ『万葉集』の「為君」山田之沢 惠具採跡 雪消之水尔 裳裾所沾（巻一〇・一八三九）や「従明日者 春菜将採跡 標之野尔 昨日毛今日母 雪波布利管」（巻八・四二七・山部赤人）、「多麻河泊尔 左良須豆久利 佐良左良尔 奈七曾許能 兒乃 己許太可奈之伎」（巻一四・二三七三・東歌）や『続日本紀』の「新年始邇 何久志社 供奉良米 万代摩提丹」（巻一四・天平十四年正月壬戌条）などと類型をなしている。
- (三一) 契沖『古今余材抄』二四九番歌詞書注（久松潜一校訂代表『契沖全集』第八巻 岩波書店 一九七三年）。
- (三二) 藤原清輔『袋草紙』に「人のいと知らざる古歌などは読むべき事か。見知ることなくて撰集に入りなば、吾が物に成り了る」（藤岡忠美校注『袋草紙』新日本古典文学大系29 岩波書店 一九九五年）とあり、古今集時代にも古歌を詠出した人が「読人」として記されることがあったならば、その歌が「詠者の年代」と相違することはあり得る。
- (三三) 西下経一『古今和歌集』日本古典全書（朝日新聞社 一九四八年）。
- (三四) 谷鼎『古今和歌集評解』（有精堂 一九四九年）。
- (三五) 佐伯梅友『古今和歌集』日本古典文学大系8（岩波書店 一九五八年）。

〔三六〕 小沢（一九七二）ではそれぞれの「時代」が「時期」となり、Ⅲは「撰者時代」から「撰者たちの時期」と名称に若干変更がある。

〔三七〕 新井栄蔵・小島憲之校注『古今和歌集』新日本文学大系5（岩波書店 一九八九年）。